

第1章

町産業の牽引役



【プロフィール】

中沢 一（なかざわひとし）

1933年生まれ 坂城町出身

1958～1991年 長野県職員

1991～1998年 坂城町助役（2期）

1999～2011年 坂城町長（3期）

2009～2011年 長野県町村会副会長

趣味は家庭菜園

**先進的で、自立心旺盛な坂城の人々
根っこには、温かな共生の心が息づく**

前坂城町長 **中沢 一**

Nakazawa Hitoshi



坂城町といえば、製造業が約200社と、県下有数の工業技術集積地として高名だが、実はさまざまな見どころがある。観光資源も豊かなのである。

たとえば、「さかき千曲川バラ公園」。悠久の千曲川の河畔にあるこのバラ園では、毎年5〜6月に、約330品種2300株のバラが芳香を放ちつつ、多彩な花を咲かせ、訪れる多くの人々を楽

しませている。刀匠として著名な、人間国宝・故宮入行平刀匠の功績を顕彰した「鉄の展示館」も、村上義清に関する貴重な資料を展示する「坂木宿ふるさと歴史館」も見逃せない。

こうした、産業と文化両面における魅力的な町づくりの功労者の1人が、ここで紹介する中沢一さんである。

「長野県庁で労働委員会事務局長を務めていたとき、当時の柳沢町長から打診があつて、坂城町の助役になりました。坂城は生まれ故郷ですから、引き受けた。助役を平成3年（1991）から2期8年間、平成11年（1999）から3期12年、町長を務めました。自分が開設に関わったものは、びんぐし湯さん館、さかき千曲川バラ公園、鉄の展示館、坂木宿ふるさと歴史館、坂城テクノセンター、坂城勤労者総合福祉センター、テクノさかき駅などです」

「町政に携わった当初、坂城町には、観光資源が少なく感じていました。そこで、後々に町の観光名所となるような施設を整備しました。町の皆さんが『友人・知人と呼んで、見せるところができた』と、とても喜んでくれました」。

また、テクノセンター開設で、企業同士の横のつながり、協力関係が一層深まり、技術交流も進みました」

工業面での体質強化と観光面で新たな特色作りができたことは、企業や町民の皆さんのお陰だと感謝の思いを語る。

「行政には力がないのです。まちづくりや産業の発展は民間が主体です。企業や住民の力は強く、先へ先へと進む。行政は、特徴づけをしながら後押しをするだけです。個々の企業の成長しようとする力目は目を見張るものがあります。それから個々の力をまとめて、一定の方向づけをするのです。その力を町の一層の発展につなげることが、行政としてとても重要です」

町での最初の大きな仕事は、「財団法人（現・公益財団法人）さかきテクノセンター」の設立だったという。

「上田市を中心とした東信地域の3市6町1村の産業活性化を目指す『浅間テクノポリス』計画が、県によって打ち出されました。そこで、『さかきテクノセンター』をつくりました。これは他の地域にはありません。企業各社の融和を図

りながら、技術交流を進めました。母校の信州大学繊維学部の方に、技術的なアドバイスをしてもらったり、長野工業試験場の元場長の4人の方に指導してもらったりしました。坂城の人たちは、互いに助け合うノウハウを昔から持っていたので、大変喜ばれ、成果も上がりました」

現在、「(公財) さかきテクノセンター」は、技術開発の支援、人材育成、企業間交流、情報提供等を行う中核として、地域の産業の発展や産業創出に多大な貢献をしている。まさに、設立時の理念を継承し、今も発展させているといえよう。

平成4年(1992)、中国の復旦大学が長野大学と連携し、工業発展の集積地である坂城を訪ねてきた。目的は日本の中小企業を調査し、中国で応用すること。当時、坂城の企業の間で中国市場に対する関心が高かったこともあり、連携することに決めた。

「私は、県職員時代に、香港に3年半駐在した経験があったので、中国に関心がありました。長野大学から復旦大学の話があったときは、すぐに乗りました」

平成10年(1998)の長野冬季パラリンピックにも、坂城のものづくりの力が活かされている。

「県の教育長から『長野パラリンピックで選手たちを運ぶ雪上車を開発してほしい』との依頼がありました。ものづくりのまちだからということで引き受けましたが、誰も作った経験がないので苦労しましたね。企業の技術者がグループを組んで研究を重ね、15台の雪上車を製作してくれました」

同年、「テクノさかき駅」が、「坂城勤労者総合福祉センター」に隣接して、同時開設された。中沢さんは感慨深げに語る。

「しなの鉄道関係者からは、『〇〇町北駅とか、何々駅というのが一般的です。『テクノさかき』なんて名前はどうかしようか』とやんわり反対されました。しかし、当時の吉村午良知事が、『面白くていいじゃないか』と賛成してくれたので、この名に決まったようです」

坂城といえば、戦国時代、甲斐の虎・武田信玄軍を2度も敗走させた村上義清の本拠地としても知られる。最盛時に



町内企業の技術を結集して雪上車を完成させた

は、東の佐久から北の水内・高井までを支配した勇将として名を馳せた。また、坂城は古来、北国街道の宿場町「坂木宿」として栄えた場所だ。

「坂木宿ふるさと歴史館」では、こうした坂城の歴史と文化に関する資料を見ることが出来る。

「『さかき千曲川バラ公園』は、管理に



平成14年 鉄の展示館オープニングセレモニー

手間と金がかかります。また、バラの手入れは非常に難しい。だが、坂城は戦前からバラ生産をしていたので、技術的ノウハウがある。だから、町内各企業に小区画を管理してもらうオーナーバラ園制度を導入して、現在では二十数区画（注・令和3年度現在25区画）ある。区画をお持ちの各社には責任を持って育ててもらいましょう」

「鉄の展示館」についてのエピソードを語る中沢さんは、楽しそうだ。

「坂城は、国の重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝の故宮入行平刀匠が生まれ育ち、活躍した地です。その一門・門弟の刀匠方は、宮入一門会として全国で比類ない活躍をしています。また、村上義清時代と思われる、たたら製鉄炉が2基確認されています。そうした坂城の鉄の歴史を紹介するために『鉄の展示館』を開設しました。今、10社ほどの工業製品も展示されています」

「愉快なのは、1億円の開設補助金を中小企業庁に申請に行ったことです。最初『刀剣館』の名を出したところ、『中小企業庁と刀剣は無関係だ。文部科学省に行ってくれ』とのこと。とっさに『実は、坂城は企業の町で、鉄が原点だ。鉄の展示館を開きたい』という言葉が出た。するとそれが『いいアイデアだ』ということになり、1億円もらえた（笑）。その流れで『鉄の展示館』という名称になりました。そのとき思ったのは、相手が納得するような話し方・提示の仕方がいかに重要か、ということですよ」

平成11年（1999）から政府主導で進められた、通称「平成の大合併」の際は、坂城町にも複数の自治体から合併の勧誘があったが、中沢さんは反対した。ものづくりで雇用は安定し裕福である町が、なぜ他市町村と合併する必要があるのか？ そう疑問に思ったからだ。

中沢さんには、坂城は歴史的に、ものづくりに対する熱意と技術力で時代をリードし、自立してきた町だという思いがある。

「昔は養蚕の産地でした。それからりんご栽培、次にぶどうになった。元来、農業の面でも先進的な地でした。こうした進取の精神が、今の『テクノの町・坂城』へとつながり、脈々と生きています」

そして、この先進性・自立性は、人々の切磋琢磨する心と、共生・協調する温かな心の両方に支えられている、と中沢さんは考えている。



【プロフィール】

鈴木秀典（すずきひでのり）

1939年生まれ 坂城町出身

1986～2009年 有鈴木商会 代表取締役社長

2009～2012年 代表取締役会長

1989～1995年 坂城町商工会 理事

1995～2003年 副会長

2003～2015年 会長

2009～2015年 長野県商工会連合会 副会長

坂城と商工会員のために何をすべきか？ 模索し続けた商工会長4期12年

坂城町商工会
元会長

鈴木秀典

Suzuki Hidenori

鈴木秀典さんは、平成15年(2003)、64歳で坂城町商工会会長に就任した。

以後4期12年にわたり、自動車会社を営む傍ら、商工会長として坂城の商工業の発展に尽力した。同時に、県商工会連合会の副会長も長期間務め、長野県の商工業振興のために活躍。その功績が認められ、平成24年に旭日単光章を授与された。

現在では、家業と商工会の第一線から退いた鈴木さんは、商工会長時代のことをこう回顧する。

「私は、坂城と商工会会員のために何をするべきか? ということを第一義に考えてきました」

「お陰さまで、坂城の企業は商業も工業も、業種を越えて親密でまとまりがある。このお陰で大変、助けられました。お祭りやチャリティイベントにもとても協力的で、円滑に進めることもできました。また、会員数、青年部の部員数は、県下でも有数であり、これも心強い限りです」

「リーマンショックの難局の際も、各会員が孤立することなく、お互いに話

し合い、励まし合いながら情報交換をし、再起を期してきました。そのことに商工会も、多少はお役に立てたのではないかと考えています」

平成20年(2008)のリーマンショックでは、坂城の企業も大きな打撃を受けた。それを受け、商工会ではまず商工会員の会費の20パーセントカット案を決定して、即座に実行した。

「商工会主催で、各種の講習も行いましたがこれはいわば雇用調整。講習を受けることで、国から補助が出た関係もあり、いろいろな勉強会を計画・実施したのです。決算書の読み方や決算の組み方から、技術的な学習も行いました。町と共同で運営する「中小企業能力開発学院」では、新入社員の研修も行いました。参加者も多かったため、それなりにまとまった金額の補助金をいただけることができました」

さらに、八十二銀行、長野県信用組合、長野銀行、長野信用金庫の町内金融機関との懇談会を設け、融資や返済、利息などについて、きめ細かな要望を行っ

た。

鈴木さんは、若いころから商工会に携わってきて、64歳で会長となった。そんな鈴木さんにとって、青年部長時代にリードした「千曲川坂城陣太鼓」の立ち上げは、懐かしい思い出という。

千曲川坂城陣太鼓は現在、大変盛んで、「二打入魂」を合い言葉に若者から年配の人まで大勢が参加している。なかでも特に目立つのが若い女性の存在。町のお祭りをはじめ多くの機会に、日ごろ鍛えた勇壮な演技を披露している。

時は昭和の終わりに遡る。工業が盛んでイベントの多い坂城ではあったが、行事を彩る出し物やパフォーマンスがなかった。行事・イベントが、何の前触れ



青年部長 OB。坂城町商工会員は業種の垣根を越えた一体感がある

もなくいきなり始まる味気なさ。

商工会、時の鈴木青年部長は、そのことを憂えて、陣太鼓グループを作ること

を理事会に提案し、承認された。

「有名な御諏訪太鼓の保存会会長だった、今は亡き小口大八先生に指導をお願いして、文化センターや武道館で、猛特訓をしてもらいました。青年部の30人が主体でしたが、みんなよく協力と努力をしてくれましたね」

町内での行事やイベントのほか、上山田町（現千曲市）の旅館からもたびたび依頼されて、お客さんの前で披露した。

「上山田の上田館には1週間に2、3回行った時期があります。清風園、上山田ホテル、圓山荘でも披露しました」

「結成して1、2年経ったころのことです。小口大八先生の紹介で、台湾にも行きました。台湾には、日本の大使館がなく、代わりに日本観光協会の事務所が旅行者のお手伝いを行っていたのですが、そこを大使館のように規模を大きくしたことの祝いに、推薦されて太鼓を打ちに行ったんです。台湾に3泊して披

露しました」

「サンフランシスコの桜祭りやシンガポールなど、海外にも3、4回行って好評を博したものです。打ち手がみんな、また行きたがるんですよ。『推薦してくれ。準備してくれ。次はどこへ行くか、段取りしてくれ』ということで」

千曲川坂城陣太鼓の規模は、大きい太鼓が1つ。前に小さい太鼓が4つ。相撲大鼓が2つ。締太鼓が2つ。シンバルに似た、金属音でリズムを取るチャップパという楽器や、バチでたたく鉄筒がある。

太鼓は音程がなく、リズムだけで合わせるのだが、大太鼓の太い音と、相撲大鼓のような細い音をセットにすることで、音程のように聞こえる。しかし、その中心はあくまでリズム。会員は一体となって太鼓を奏でた。

さて、太鼓以外の活動で、鈴木さんが青年部長のときに中心になって始めたものに、チャリティバザーがある。坂城町の商工会が毎年、12月31日に坂城神社で行うもので、ここで得た利益を町のために役立てている。



坂城町商業フェアで披露される千曲川坂城陣太鼓

「売り上げのうち、毎年20万〜30万円ぐらいを、3小学校、1中学校、3保育園、1幼稚園に順番に寄付しています。『必要なものを買ってください』と、現金を差し上げています」

町の街灯の一部はこのバザーの売り上げで設置した。



毎年大晦日の夜、青年部が中心となって坂城神社にてチャリティイベントを開く

バザーの内容は、最初の年は車の前に飾る「おしめ」。2年目からは「だるま」である。注文をとって名入れするので、相当な人気だ。トラックで坂城神社の社務所に運び、お祓いをしてもらったものを当日、並べるのである。かなり多くのだるまを、境内の相撲の土俵いっぱいに並べるが、坂城の多くの企業がこぞって買ってくれるので完売する。併せて個人も大勢買ってくれるのだとか。また、商工会婦人部がそばをふるまい、綿あめ、焼きそばなどの販売もしている。

また、鈴木さんが会長に就任したころは、全国的に商店街が衰退していく時期だった。そこで、駅前商店街を再生しようと、考えられる限りの計画を立て実行したという。

「坂城は昔から工業系企業の会員数が多かったのです。しかし、商業は、戸倉・上田・長野など大きな商圈にお客さまを取られて、元気がありませんでした。そこで地元商業を活気づけるために、プレミアム付きの商品券を発行するなど、さまざまな手を打ちました。地域活性化のための商品券の発行は、日本でも早いほうです」

「商業フェア」や「お客様大感謝祭」を駅前で行ったこともある。商業者が一堂に集まって、町民に奉仕しようというイベントで、盛大に行われた。ダンパーの荷台に山のように積まれた大根を駅前で、洗わないまま1本100円で売ったり、日本各地の駅弁を集めては、売ったりと商店街のにぎわいづくりに力を尽くした。

商業者が集うイベントは、現在では

「ふ〜ど市」など趣向を変えながら開催され、多くのお客さんで賑わっている。

このように、鈴木さんは、若いときから町の商工業の発展に深く関わってきた。後には、商工会長として4期12年間、誠心誠意かつ大らかに坂城の人々と交流してきた。坂城への熱い思いは、会長を退いた現在でも、決して変わっていない。

鈴木さんが商工会で誠心誠意かつ大らかに坂城の人々と交流しながら取り組んできた多くの活動が、今でも時代のニーズに合わせ、形を変えながら続けられている。しかし、坂城の商工業の発展を願う熱い思いは決して変わることはない。



ふ〜ど市は多くの来場者で賑わう